「義経の物語」の受容と『義経記』

―『看聞日記』記事を中心に―

谷村知子

一　はじめに

『看聞日記』（『看聞御記』）は、途中欠けるところはあるものの応永二十三年（一四一六）から文安五年（一四四八）にかけての後崇光院伏見宮貞成親王による日記である。この『看聞日記』とその筆者貞成親王については、横井清氏・位藤邦生氏などを始めとして、最近では森正人氏を中心としてまとめられた研究成果や伊藤慎吾氏の論考などを挙げることができる。[1]

『看聞日記』には文学・絵画・芸能関係の記事が多く、そこから当時の文化的活動を知ることができる。たとえば「平家」を語る琵琶法師が宮家を頻繁に訪れたことや、『太平記』を貞成親王自身が読み上げそれを皆が聴いたこと、また『太平記』の書写が行われる様子など、軍記物語の享受に関連する記事が多く見られる。[2]これらについては『平家物語』や『太平記』との関係から考察されている[3]が、『看聞日記』はそれら軍記物語の享受を考察する上で重要な資料である。

この『看聞日記』において、『義経記』に関連する記事も見出すことができる。『義経記』は室町時代前期の成立と推定されているが、本稿では、その『義経記』成立の時期と近い十五世紀前半の『看聞日記』における『義経記』に関連する記事を中心に検討を行い、この時期の「義経の物語」の受容の考察から、『義経記』の本質的な部分に迫っていきたい。

二　『九郎判官物語』について

一　一口物語一帖　　一　保元物語二帖□（上下）

一　平治物語二帖上下 椎野本　　一　平家物語二帖

一　九郎判官物語一巻　　一　承久物語一巻中
一　太平記三帖第三第四第五　　一　太平記一巻第九半書残之
一　梅松論一帖　　一　堺記一帖

この記事④は『看聞日記』応永二十八年（一四二一）正月から十二月にかけての紙背文書に見られる「諸物語目録」の一部である。この「諸物語目録」には「応永二十七年十一月十三日取目録畢」という奥書があり、その時期のものと思われる。おなじく紙背文書には即成院や法安寺、大光明寺といった伏見宮家と深い関係にあった寺院へ書籍を預け置いた目録もあり、伏見宮家伝来の書籍が火災や盗難を避けるために預け置かれたのである⑤。この物語目録も預け先は記されていないが、同じようなものであろう。

この中に「九郎判官物語　一巻」という書名を見ることができる。これがどのようなものか詳かではないが、岡見正雄氏・天野文雄氏などの指摘のように⑥、「一巻」ということなのでそう大部のものではないであろう。現存するものは八巻立てで、この「一巻」で一つのまとまりをもつものか、またそれ以上の巻立ての一部かは不明である。しかし「九郎判官」という以上義経を主題としたものと思われ、独立した形のものの最初の記録であろう。しかも「判官物語」という名称については、室町時代後期を遡ることはないけれども、現存する写本が「判官物語」・「義経物語」といった書名となっている。そういった点から考えてみると、これは『義経記』の初期段階を示し、さらには「判官物語」からの出発を考えることができるであろう。

そしてその配列を見てみると、「保元物語」「平治物語」「平家物語」に続いて「九郎判官物語」、さらに「承久物語」「太平記」「梅松論」「堺記」というように、「保元物語」から始まる一連の軍記物語を中心とした流れの中に位置付けられていることがわかる。つまりこの時期に、義経を扱う『平治物語』・『平家物語』などとは別にまた並べ置くことのできる、義経の事績をまとめて「九郎判官物語」としたものができあがっていたことになる。

それではその背景としてどのようなことが考えられるであろうか。それは義経についてだけではなく、彼に影のように付き従った弁慶の場合についても見ることができる。

内裏物語御用之由被仰下之間。史漢物語六巻。武蔵坊弁慶物語二巻献之。

この『看聞日記』永享六年（一四三三）十一月六日条⑦では、後花園天皇の所望により「武蔵坊弁慶物語　二巻」が献上されたことを記してある。この「武蔵坊弁慶物語」については、穂久邇文庫蔵の「武蔵坊弁慶物語」が近いのではないかと推定されている⑧。ここでは、『義経記』後半部で義経を凌ぎ物語の中心ともなる弁慶につい

て、独立して一つの物語となっている。

このように、『平治物語』や『平家物語』といった大きな世界から飛び出して、義経や弁慶というように個人に焦点を当てたものが一つの形をとるようになる。そこには、源平合戦の英雄義経と彼をめぐる人々が独立して物語化されていく過程が存在するであろう。そして、『看聞日記』に「九郎判官物語」の書名が記され享受された時代において、「義経の物語」は具体的にどのように受容されていたのであろうか。次に、「九郎判官義経奥州泰衡等被討伐絵」について検討してみたい。

三　「九郎判官義経奥州泰衡等被討伐絵」について

次に、永享十年六月の記事を検討してみたい。

地蔵御絵返献。又十二神絵（竜顔歌合）被下。電覧則返進。又九郎判官奥州泰衡等被討伐絵十巻給。室町殿被進絵也。殊更殊勝握翫無極。詞参議拾遺行忠卿。絵所従四位藤原朝臣行光筆也。男共祗候覧之。行豊朝臣読詞。　（永享十年〈一四三八〉六月八日条）

絵覧之慰徒然。絵銘泰衡征伐絵也。大事之御絵之間怱返進。　（永享十年六月九日条）

永享十年六月八日条では、前日に後花園天皇から下された「地蔵験記絵」を返献し、「十二神絵」を下賜された。そしてそれをまた返上したところ、今度はまた「九郎判官義経奥州泰衡等被討伐絵十巻」を賜った。その絵は室町殿足利義教が献上した絵で、非常にすばらしいものであった。詞書は参議拾遺（侍従）藤原（世尊寺）行忠。彼は書の家、世尊寺家の人である。絵は絵所の藤原（土佐）行光。つまり土佐派の祖とされる土佐行光の手になるもの。貞成親王の側近たちがこれを一緒に見て、側近の世尊寺行豊が詞書を読み上げた。翌九日もまた、その絵を見て徒然を慰めた。絵の銘は「泰衡征伐絵」ともあり、貴重な絵であるので急ぎ返上したことなどがわかる。

この「九郎判官義経奥州泰衡等被討伐絵十巻」（以下「被討伐絵」）、同じく「泰衡征伐絵」については、侍読として貞成親王の次男貞常親王のそば近く仕えていた中原康富による『康富記』[9]嘉吉二年（一四四二）十二月三日条にも登場する。それには、

参伏見殿御読、欲退出時分、文治頼朝幕下被責奥州泰衡御絵十巻有之、被召出、自一至五拝見之、読申詞了、及昏黒之間退出、・五巻（残カ）不拝見無念、鎌倉方河村千鶴丸十三歳、為先懸七人之内、潜通畠山之陣前之由見了、泰衡方云々別当子十三歳、討死之由見了、殊勝之御絵也

とあり、康富が参上していた伏見殿から退出しようとする頃召出され、「文治頼朝幕下被責奥州泰衡御絵十巻」の一巻から五巻まで拝

見し詞書を読み申し上げたこと、夜が更けてきたので残りの五巻は見ることができず残念であったこと、これは最後に見た五巻の終わりの部分であろうか、畠山の陣前を潜かに通り抜け駆けをした七人の内の一人で十三歳の河村千鶴丸、そしてそれと対照的に討死してしまった泰衡方十三歳の別当子の部分を見、見事な絵であったことが記される。

この「文治頼朝幕下被責奥州泰衡御絵十巻」は『看聞日記』の「被討伐絵」と同じものと考えてよいであろう。この『康富記』の記述から後半の泰衡討伐の部分を具体的に知ることができる。この河村千鶴丸等の抜け駆けと別当子討死の話は、奥州合戦での激戦、阿津賀志山の戦いであると思われる。『吾妻鏡』[10] 文治五年（一一八九）八月九日・十日条を見てみると、

九日丙申。入レ夜。明旦越二阿津賀志山一。可レ遂二合戦一之由被レ定レ之。爰三浦平六義村。葛西三郎清重。工藤小次郎行光。同三郎祐光。狩野五郎親光。藤澤次郎清近。河村千鶴丸。年十三才。以上七騎。潜馳二過畠山次郎之陣一。越二此山一。欲レ進二前登一。是天曙之後。

また、

（十日）其中金剛別当子息下須房太郎秀方。年十三。残留防戦。駕二黒駮馬一。敵向レ髦陣。其気色掲焉也。工藤小次郎行光欲二馳並二之剋。行光郎従藤五男。相隔而取二合于秀方一。此間見二顔色一。幼稚者也。雖レ問二姓名一。敢不レ発レ詞。然而一人留之条。称レ有二子細一。誅レ之畢。強力之甚不レ似二若少一。相争之処。対揚良久云々。

とあり、このような両陣営十三歳の少年の活躍が場面の中心に描かれていたようである。

さらにこの絵については、北朝の近衛道嗣による『愚管記』[11]（『後深心院関白記』）延文四年（一三五九）五月十五日条で、

自武家密々送給後素一合可見之由命之、鎌倉右幕下征伐泰衡之絵也、此絵最初、詞可草給之由先年以故賢俊僧正被示之間、任筆書遣了、仍出来之最前被見之由被命之、殊有其興、追可返進之由返答畢

とあり、幕府から密かに「鎌倉右幕下征伐泰衡之絵」が届けられ、道嗣はそれを見るように命じられる。鎌倉幕府源頼朝による奥州泰衡征伐を題材とした絵であった。この絵は最初、足利尊氏等を政治的に支えた醍醐三宝院の故賢俊僧正を通じ、道嗣が詞書の起草を依頼され書いたものであった。出来上がりを先ず見せられ、すばらしいものであったが追ってそれを返すことを返答したとある。

これら『看聞日記』・『康富記』・『愚管記』での絵について、岡見氏はおそらく同一のものであろうと指摘されているが[12]、それに従い

たい。頼朝による義経も含めた泰衡討伐の奥州合戦が題材とした十巻の絵巻が、足利氏のもとで制作され、室町殿と貞成親王・後花園天皇の周辺を行き来していたのである。また、制作時を延文四年前後とする『愚管記』の記事と『看聞日記』記事とを比較してみると、『看聞日記』永享十年六月八日条の「被討伐絵」の詞書を清書した世尊寺行光が参議侍従であったのは、『公卿補任』[13]によれば貞治五年（一三六六）十二月から応安四年（一三七一）十二月までのことで、また経歴は明らかではないが土佐派の祖とされる、絵を担当した土佐行光の活躍した時期は後光厳天皇の時代（文和元年〈一三五二〉～応安四年）とされることなどとあわせてみても、だいたいこの時期と考えることができる。また、『看聞日記』前日の永享十年六月七日条に、

抑内裏より地蔵験記絵一合六巻給。室町殿御絵云々。此間御不予本復御養生之間。御つれ〳〵なくさめニ絵有御尋。是へも奉。雖相尋未出来。室町殿へ被申間被進云々。此絵奥書云。

外題　参議正二位行侍従藤原朝臣行忠卿

清書　散位従四位上藤原朝臣業清

絵々所　散位従四位上藤原朝臣行光

但大進法眼善祐書之云々

貞治打孟秋上澣

権中納言藤原朝臣為秀

殊勝絵也。地蔵験記流普絵ニハ聊替所あり。同事もあり。

とあり、その「地蔵験記絵」の制作メンバーに八日の「被討伐絵」の記事に見える世尊寺行忠や土佐行光の名がある。この記事に従えば、貞治六年（一三六七）に「被討伐絵」と同じような制作環境があったことがうかがわれる。

この「被討伐絵」について、岡見氏は何か義経の最期を主題とした絵巻を想定され[15]、近代に入って完成された日本画の目録『考古画譜』[16]に、

高館合戦絵詞　一巻

画、越前守行光、詞、世尊寺三位行忠卿、

〔補〕真頼曰、高館合戦絵模本一巻、博物館にあり、巻尾云、

筆者越前守藤原行光、詞三品行忠卿、右者島津家に有レ之、と見えたり、

とあるのを受けて、現東京国立博物館蔵の「高館合戦絵巻」[17]がこの一部であろうと述べておられる。

また、美術史の方からは谷信一氏が、この「高館合戦絵巻」と行光の関係について消極的な意見を提示しておられる[18]が、近年高岸輝氏によって、詳細な検討がなされている[19]。高岸氏によれば、この絵巻の成立状況について、先の『康富記』そして『愚管記』をもとに、

一三五〇年代まだ不安定な室町幕府のもと、三宝院賢俊の企画によって足利氏がその政治的意図において、つまり頼朝の奥州征伐を源氏政権の象徴ととらえ、それを自らの権威の象徴として取り込んだ足利氏がこの絵巻を制作したということ、また醍醐寺を中心とした賢俊と行光の関係も含め、この行光の「泰衡討伐絵」が室町時代土佐派の出発点としての作例であるということである。さらに、

「泰衡征伐絵」全十巻の前半部分に義経の「奥州落」や義経が泰衡に討たれた「高舘合戦」の場面が含まれていたことは十分に考えられる。

と、「被討伐絵」について、やはり義経の北国落から高館での最期を先に持つものであろうかと述べておられる。

義経の北国落譚が含まれていたかどうかはわからないが、義経の衣川での最期を語る部分が先にあり、続いて頼朝の奥州泰衡の討伐を描く絵巻であった。しかも絵の名にあるように、義経の最期を語る部分は強い印象を持って受け入れられていたのである。

四　「被討伐絵」の享受

そういった政治的な意図を持って制作された絵巻が、貞成親王の周辺においてどのように扱われているのか。木原弘美氏は[20]『看聞日記』記事を中心として貞成親王周辺の絵巻に関する活動に注目され、その行き来が公家社会の交流さらには幕府との関係を示すもの、つまり絵巻が親王周辺の文化的・政治的交流の媒体として用いられていたと述べられる。また、三田村雅子氏は[21]室町幕府足利義教から秘蔵の絵画が提供されるということは、足利将軍家が弱気を見せるようになったことの表れであり、それにより後花園天皇と父貞成親王にとっては慶びと満足を与えられたと指摘される。つまり室町幕府草創の時期にその基盤を支える意図を持って制作された絵巻が、今度は朝廷と幕府の間の微妙な政治的バランスの上にやりとりされていたと認められる。しかし、この「被討伐絵」の実際の享受はまた異なっていたのではないだろうか。

先の『看聞日記』永享十年六月八日条では、すばらしいできばえの絵巻を前に近臣たちを集めて、そのうちの一人世尊寺行豊に詞書を読ませている。この行豊は能書家でもあるが他にも「平家絵」を読んだりしており（永享十年六月十三日条）、読み上げるのに適した人物であったのであろう。高橋伸幸氏が『平家物語』の「読み」ということを絵の詞を読むケースであると指摘され[22]、櫻井陽子氏が琵琶法師の語りを追体験する一方、絵巻のヴィジュアルな情景を目のあたりにして新鮮な喜びを味わうという、平家物語の享受の方法の一つとして絵画というものも存在したと指摘されるように[23]、絵巻の絵を見ながら詞書を「読む」ということも軍記物語のひとつの享

受形態としてとらえることができるであろう。『看聞日記』中にも頻繁に見られる盛んな琵琶法師の活動に触発され、それと平行するように、琵琶法師のような専門家が音曲とともに語るのではなく、貴族たちが絵巻の絵の効果に助けられながら、自分たちでこの「被討伐絵」を楽しんだのである。

しかも注目すべきは、『看聞日記』翌九日条では、貞成親王は自らの「徒然」を「慰」めるために「被討伐絵」を用いている。また、先に挙げた前日七日条では病気後の養生をしていた後花園天皇から「御つれ〳〵なくさめニ絵」の「御尋」ねがあり、室町殿が絵を進上しその後貞成親王が賜ったようである。さらに後花園天皇側近広橋綱光の『綱光公記』[24]（『引接院内府記』・『接綱御記』）宝徳元年（一四四九）九月六日条には、

晴。為番祗候内裏。入夜自室町殿御絵三盗被進。為被御覧云々。一盗咸陽宮四幅月山筆。十二類絵三巻。義経絵十巻也。先十二類絵被御覧。菅宰相読詞。可謂希代御絵也。後咸陽宮御覧。彼是重宝近比見事。殊更咸陽御絵一段御物也。驚目斗也。太平記明徳記等被御覧。御不予猶々次第御成由医師申入間珍重外無他云々。（中略）後聞自室町殿被進御絵共自禁裏為御慰被申云々。内々伝奏侍者持参。菅宰相申次目六相副也。

とあり、ここでも「被討伐絵」と同じものと思われる「義経絵十巻」が、永享十年の時と同じく「十二類絵」（「十二神絵」[25]）とともに病床の後花園天皇を慰めるために室町殿から献上されている。

このように、政治的背景をもって制作され、文化的・政治的交流の媒体として用いられる絵巻の行き来の中にありながら、そういった足かせから自由になって、義経の最期から泰衡への頼朝の奥州征伐を描く「被討伐絵」は漫画（絵巻）好きであった父子[26]の徒然を慰めるべく享受されたといえる。

この「被討伐絵」の描いたであろう義経最期の場面は、もちろん『義経記』巻八と重なるものである。この「義経の最期の物語」が、義経を語る中で大きな比重をもっていたことがわかる。その「被討伐絵」は貞成親王父子の徒然を慰めるために用いられていた。つまり、義経の最期の場面が、徒然を慰める娯楽的要素のあるものとして享受されていたのである。言い換えれば、楽しむためのものであったということである。このように、義経主従の壮烈な最期に涙して感動するということが、後の『義経記』の流布には重要なことであったように思われる。そしてそれは、『義経記』受容の本質的な理由の一つとして考慮すべきものと考える。

また、泰衡滅亡の物語は後に『泰衡征伐物語』[27]として、さらには『奥州征伐記』[28]などとして独立・分化するようにもなる。もちろんこれらは近世的展開を遂げた結果、頼朝による奥州合戦の意義[29]から

は遠ざかったもののようである。しかし奥州合戦を題材とするものが、時代を超えて人々に受け入れられていたことにはまちがいない。

五　灯炉・風流松拍（まつばやし）の趣向

『看聞日記』ではまた『義経記』に関連するものとして、灯炉や風流松拍の趣向についての記事がある。

まず義経の少年時代を扱ったのが、永享九年（一四三七）年七月十九日条である。

内裏御灯炉二申出拝見。一ハ詩心。（棲月落花間曲）一清水風情。牛若弁慶切合風情也。殊勝一段驚目了。

これは七月の盂蘭盆の際の趣向をこらした灯炉についてで、貞成親王が内裏に申し出てその灯炉を見たところ、一つは菅原文時の漢詩を趣向としたもの、そしてもう一つが牛若と弁慶の清水での果たし合いの場面を趣向としたものであった。牛若と弁慶の果たし合いの場所を清水とすることについては、岡見氏の指摘[30]のように『義経記』と重なり注目されるもので、『義経記』の清水切り合い型が一部で理解されていたものではなかったことを示すものであろう。この他永享四年（一四三二）八月七日条には、

自内裏アヤツリ灯炉一被下。一谷合戦鵯越馬追下風情也。殊勝アヤツリ言語道断驚目了。

とあり、一ノ谷合戦鵯越えを取り上げているが、動きのあるものが多かったようである。

時期は少し戻るが、応永二十七年（一四二〇）正月十一日条の正月の松拍の風流についての記述がある。

入夜松拍参。（地下殿原）種々風流（九郎判官奥州下向之躰）有其興。酒肴賜之。

伏見御所では例年正月の松拍で伏見庄内の地下村々や侍分の地下殿原によるはやしものと踊りそして意匠をこらした作り物や仮装など風流が行われていた。村々の場合は各村民が競い合う形をとり、さまざまな趣向が登場した。この記事では地侍たちがさらに趣向をこらし、義経の奥州落ちの場面を仮装に取り入れ行列に仕立てたものと考えられる。その出来がよかったのか酒肴もふるまわれ、侍分の面目をほどこしたようである。[31]松拍の余興風流の仮装行列には当時の人々の好みや関心を反映したテーマが用いられた[32]ようで、七月の盂蘭盆の拍念仏でも応永二十六年と二十九年には畠山六郎由井の浜合戦が、応永三十年には浅井名の門破りなどがそのテーマとして選ばれており、[33]これらのテーマの人気の強さを推し量ることができる。義経の奥州落ちというテーマが何によったものかはわからないが、没落後の義経の物語が風流のテーマになるほど好まれていたということは注目されるであろう。

このように趣向として取り入れられた義経は、源平合戦の英雄と

しての義経だけではなく、不遇の少年期と没落の晩年期という失意の時代の義経であった。そして、その義経と彼をめぐる人々が、史実から離れて自由に活躍する姿を趣向とするのである。『義経記』の世界について、梶原正昭氏は歴史的実在性を踏み越えて自由に虚構的世界をくりひろげてみせることが、この作品の独自性であると述べられるが、[34]『義経記』の描く世界と通じ合い重なり合うものが、趣向として取り上げられ、理解されていたのである。

たとえば、『看聞日記』永享四年三月十四日条では演じられた猿楽の目録が記され、「九郎判官東下向」や「しつか（白拍子）」などの演目をみることができる。これらが上演されることからも、いわゆる「判官びいき」の感情が広まりつつあることがわかる。そういった「判官びいき」の感情にも支持され、『義経記』は形づくられていったのであろう。しかし『義経記』の本質を考えるとき、やはり岡見氏による「室町ごころ」[35]も大きな意味を持っていると思われる。『義経記』巻三の清水での弁慶と御曹司の戦いでも、決して悲惨で真剣なところはなく、「ほがらほがらと遊んでいる」[36]うちに、あれよあれよと弁慶は負けて御曹司に従うことになる。このような『義経記』の明るさ、滑稽さを「室町ごころ」と定義することで、『義経記』の特質の一部が規定されるのはまちがいない。その「室町ごころ」を創出するのが、活力に溢れた「都市の市民社会」であり、つまりは「室町時代のある時期の京都中心の庶民の社会」[37]だったのである。

『看聞日記』の記事では、貞成親王や後花園天皇、足利幕府将軍など高貴な人々から伏見庄の地侍・村民まで、『義経記』と重なる「義経の物語」をそれぞれの方法でそれぞれの関心・娯楽としていた。これらの人々は、近郊である伏見庄も含めて京都という都市社会で、町衆と呼ばれる庶民の活気がみなぎる、そんな「室町ごころ」の世界の人々である。都市に生き、また庶民との交わりの深かった貞成親王[38]の周辺で、特に注目されるのは、地侍や村民の「義経の物語」の理解である。先の『義経記』巻三の清水について、当時の庶民にとって最も親しみ易いところであったとおり、[39]『義経記』の展開としても庶民との関わりを抜きにしては考えられない。地侍や村民を典型的な庶民とすることはできないが、彼らが「義経の物語」を受容していたということは、一方で『義経記』の本質が「室町ごころ」を呑み込む必然性と、また他方享受の要因としての「室町ごころ」を示唆しているのではないだろうか。高貴な人々だけではない幅広い階層の人々による「義経の物語」の受容と、『義経記』に描かれる生き生きとした明るさやたくましさ、滑稽さは密接な繋がりを持つものではないだろうか。

六　おわりに

『看聞日記』に記される時代は、『義経記』だけでなく軍記物語全体にとっても大きく展開した時期であった。その流れと『義経記』もまた無関係ではあるまい。『看聞日記』には頻繁に訪れる「平家」を語る琵琶法師の姿が記されている。その語りの中には、当然『平家物語』にあるような英雄義経の姿が存在していたはずである。ところが義経は英雄として活躍するだけではなかった。人々の関心は、歴史上で華々しく活躍する英雄義経から、史実とは離れた失意の時期の義経へと新しく向かうのである。しかし、「室町ごころ」に彩られた『義経記』の世界は、失意の時代を語りながら、明るさを失わなかった。それゆえに、そこに『義経記』の独自性があるのである。そして、徒然を慰め灯炉や風流松拍の趣向となる「義経の物語」。それは『義経記』の存在意義を示し、その本質へとつながるものであろう。

注

① 横井清氏『看聞御記「王者」と「衆庶」のはざまにて』（そしえて一九七九、位藤邦生氏『伏見宮貞成の文学』（清文堂　一九九一）、森正人氏編『伏見宮文化圏の研究』（平成一〇～一一年度科学研究費補助金【基盤研究C】研究成果報告書　二〇〇〇―三）、伊藤慎吾氏「『看聞日記』における伝聞記事」（『伝承文学研究』五〇　二〇〇〇―五）

② 市古貞次氏『中世文学年表』（東京大学出版会　一九九八）、福田秀一氏・山下宏明氏「平家物語享受史年表」（高木市之助氏他編『国語国文学研究史大成　九　平家物語』三省堂　一九五九「後に増補　一九七七」）、福田秀一氏「太平記享受史年表　中世」（『日本文学研究資料叢書　戦記文学』有精堂　一九七四）などを参考とした。

③ 梶原正昭氏「『平家物語』と芸能（梶原正昭氏編『あなたが読む平家物語　平家語り　伝統と形態』有精堂　一九九四）、鶴巻由美氏「『平家』享受の一側面」（『國學院雑誌』九六―一六　一九九五―六）、渡邊昭五氏「看聞御記の物語と平家」（『平家物語太平記の語り手』〈第二章六〉〈みづき書房　一九九七〉）、櫻井陽子氏「『看聞日記』に見られる平家享受」（森正人氏編『伏見宮文化圏の研究』平成一〇～一一年度科学研究費補助金【基盤研究C】研究成果報告書　二〇〇〇―三）、加美宏氏「『看聞御記』―公家の『太平記』読みと物語僧」（『太平記享受史論考』〈第二章第三節〉桜楓社　一九八八）など。

④ 本文の引用は、宮内庁書陵部編『図書寮叢刊　看聞日記紙背文書・別記』（養徳社　一九七二）による。なお「一口物語」については、石塚一雄氏「資料紹介　後崇光院宸筆　物語説話断簡について」（『書陵部紀要』一七　一九六五―一〇）、同「資料紹介　むかし女房の一口ものかたり」（『書陵部紀要』三〇　一九七九―二）を参考とした。

⑤ 「看聞日記紙背文書　解題」（宮内庁書陵部編『図書寮叢刊　看聞日記紙背文書・別記』養徳社　一九七二）

⑥ 岡見正雄氏「義経記　総説」（岡見正雄氏・角川源義氏編『鑑賞日本古典文学　太平記・曽我物語・義経記』小学館　一九八六）、天野文雄氏「伝記的世界への傾斜」（北川忠彦氏編『軍記物の系譜』世界思想社　一九八五）

⑦　本文の引用は、『看聞御記』（続群書類従本）による。なお旧字体は新字体に改めた。以下、同じ。

⑧　藤井隆氏「武蔵坊弁慶絵巻　研究」（藤井隆氏編『未刊御伽草子集と研究　〔〕』未刊国文資料刊行会　一九五七）

⑨　本文の引用は、『康富記』（史料大成本）による。

⑩　本文の引用は『吾妻鏡』（国史大系本）による。

⑪　本文の引用は、『愚管記』（続史料大成本）による。

⑫　岡見正雄氏「物語より記へ」（「国語国文」七―一二　一九三八―一二）

⑬　『公卿補任』（国史大系本）（第五四巻　第二篇）による。

⑭　宮島新一氏「土佐光信と土佐派の系譜」（「日本の美術」二四七　一九八六―一二）。

⑮　注⑫に同じ。なお尾形仂氏・井川昌文氏（「義経絵巻と『義経記』」（「文学」三七―七　一九六九―七）は、「高館合戦絵巻」と『考古画譜』、『接綱御記（綱光公記）』の「義経絵」と宮内庁書陵部蔵「義経画巻」模本のそれぞれを近似したものと述べられる。

⑯　黒川真道氏編『黒川真頼全集　第二　訂正増訂考古画譜　下巻』（国書刊行会　一九一〇）

⑰　浅野長武氏他監修『日本合戦絵巻』（人物往来社　一九六二）。所載の奥平英雄氏「戦記絵巻について」の「高館合戦絵巻」の項には「弁慶、義経主従の壮烈な最期を描いている。」とし、「筆者は越前守藤原行光、詞は三品行忠卿といわれている。この模本は住吉内記が島津家所蔵本を模したものを天保二年狩野養信が写したものである。」と述べられる。

⑱　谷信一氏「藤原行光考　―土佐派研究の一節―」（「美術研究」八七〈八―三〉一九三九―三）

⑲　高岸輝氏「初期土佐派の研究　『看聞日記』所載の藤原行光筆「泰衡征伐絵」をめぐって」（「鹿島美術研究　年報　第一六号別冊」一九九九―一一）

⑳　木原弘美氏「絵巻の行き来に見る室町時代の公家社会」（「佛教大学大学院紀要」二三　一九九五―三）。また絵巻制作については、斉藤昌利氏「「看聞御記」にみる絵巻制作について」（山根有三先生古稀記念会編『日本絵画史の研究』吉川弘文館　一九八九）も参照した。

㉑　三谷邦明氏・三田村雅子氏『源氏物語絵巻の謎を読み解く』（角川書店　一九九七）の三田村氏執筆部第四章より。

㉒　高橋伸幸氏「『平家物語』の「語り」と「読み」」（「国文学解釈と鑑賞」五三―一三　一九八八―一二）

㉓　櫻井陽子氏「『平家物語』と『平家物語絵巻』」（林原美術館編『平家物語絵巻』クレオ　一九九四）。また注③櫻井氏に同じ。

㉔　本文の引用は、『綱光公記』（国立歴史民族博物館蔵本）による。なお旧字体は新字体に改め、適宜句読点を施した。

㉕　注④石塚氏「資料紹介　後崇光院宸筆　物語説話断簡について」と同じ。今谷明氏「王権の周辺」（朝日新聞学芸部編『中世の光景』朝日新聞社　一九九四）等を参考とした。

㉖　注㉕今谷氏に同じ。

㉗　『続群書類従　第二十輯上　合戦部』等に収載。『群書解題　第四巻』によれば、江戸初期の成立かとする。

㉘　藤沢毅氏「翻字『奥州征伐記』（一）」～「同（四）」（「広島文教女子大学紀要」三二　一九九七―一二～三五　二〇〇〇―一二）、同「『絵本平泉実記』の典拠」（「文教国文学」三八・三九　一九九八―三）、久米晶文氏「幻の書『奥州征伐記』と義経の「色好み」」（「専修人文論集」六五　一九九九―一〇）等を参考とした。

㉙　川合康氏（『源平合戦の虚像を剥ぐ』講談社　一九九六）は、奥州合

戦が内乱の政治的な総括として、頼義の正統な後継者としての頼朝による前九年合戦の再現であり、「源氏将軍」という「神話」の起点であったと述べられる。

㉚　岡見正雄氏「解説」（『日本古典文学大系　義経記』岩波書店　一九五九）

㉛　木内一夫氏「看聞御記に見えたる松拍　―その様態と当代猿楽―」（『國學院雑誌』七二―五　一九七一―五）、市野千鶴子氏「伏見御所周辺の生活文化　―看聞日記にみる―」（『書陵部紀要』三三　一九八二―二）

㉜　梶原正昭氏「解説」（梶原正昭氏校注・訳『日本古典文学全集　義経記』小学館　一九七二）

㉝　木内一夫氏「看聞御記に見えたる地蔵詣・念仏躍と風流」（『國學院雑誌』七六―五　一九七五―五）

㉞　注㉜に同じ。

㉟　岡見正雄氏「室町ごころ」（『国語国文』二一―一　一九五一―一）〈『室町文学の世界』（第一章第一節）（岩波書店　一九九六）所収〉

㊱　注⑥岡見氏に同じ。

㊲　注㉟に同じ。

㊳　横井氏（注①横井氏に同じ。）は貞成親王について、都鄙の衆庶の生活と心情に深い関心を寄せ、京中に入っても伏見が心の故郷であったのではと述べられる。

㊴　注㉟に同じ。

付記

本稿は日本文学協会第二十回研究発表会（二〇〇〇年七月二日・於大阪成蹊女子短期大学）での口頭発表の一部をもとに新たにまとめたものです。席上御教示いただきました方々に深謝申し上げます。また、閲覧・複写等の便宜を賜りました国立歴史民俗博物館の方々に厚く御礼申し上げます。